

## 神田神保町の古絵葉書

@Tokyo

「日本には四季がある」——なんて、日本でつくられた日本紹介の本には書いてあるのだが、赤道直下にも位置していない限り、世界中のほとんどの国には四季がある。ただその形態が異なっているだけだと思う。数年前に訪れたサハリンの秋の美しさは、

で、突然素敵なコーヒー・ショップと出遭う。春になると、風に吹かれた桜の花弁が、どこからともなく舞ってくる。すべての有機物に黴かびが生え出してしまい、雨の朝、おそらく合唱部の練習なのか、明治大学の構内から爽やかな歌声が聞こえてきた。

そういうこともあるかもしれないが、わたしが神保町を好きな最大の理由は、やはり古書店街の存在だと思う。古書店巡りをしていると、過去の知が、「これを読め、もつと知れ」とわたしに迫ってくるかのようだ。

3年ほど前に、岩波書店から『過去は死なない——メディア・記憶・歴史』を上梓していただいた。その研究のために、古書店をずいぶん歩き回ったものである。街に金木犀キンモクセイの香りが漂うころだった、と記憶する。

わたしは、画集、写真、絵葉書、カード類を主に扱う古書店にいた。なにげなく、ロンドン塔が描かれた絵葉書を手に取った。裏返し

てみると、1910年代後半にロンドンから日本人の友人に宛て送られたものである。文面は英語だった。

England-Japan.  
Good Allies.  
May they remain so.

と書かれ、送り主のサインがあった。

以下はわたしのまったくの想像である。おそらく二人は、日本と英国の政府関係者か大企業の職員であり、ロンドンか東京勤務中に出会い、そして友人となった。二人の友情のように、両国間の関係も継続するようお願い、ロンドン在住の者が日本の友人に絵葉書を送った。

その後、政府の膨張政策を主因として、日本は世界から孤立していく。日英同盟は破棄され、両国は互いを敵として激しく戦った。この二人の友情は、その時間の試練に耐えられたのだろうか？ たった一枚の絵葉書だが、そのとき、わたしの想像は制約を排して自在に馳はせた。☺

死ぬまで忘れられないだろう。

東京に初めて行ったとき、それほど好きにはなれなかった。でも、神田神保町は昔から好きなエリアだ。そこにある出版社には、親しい友人が多いからなのかもしれない。神保町の喧騒けんそうの表通りを一、二本外れると、思わぬ静寂があったりする。

吐く息が白く濁る真冬の裏通り